

2006
3.14
火曜日

南日本新聞

夕刊

瀬尾 昭一郎 健康コラム 思うこと

第8回

漢方薬と 民間薬

鹿児島市金生町に大国主命（おおくにぬしのみこと）を祭った「大国主神社」がある。大国主命と因幡の白兔の話は有名だ。蒲の穂綿で治療した、日本最古の薬草治療の記録がある。

薬草を乾燥させたものを生薬という。げんのしょうこ、せんぶり、どくだみ、はぶ茶、はとむぎは、よく知られた生薬だ。これらは民間薬である。漢方薬も生薬を用いるところから、民間薬と混同されやすい。要注意である。民間薬は口伝えや個人の経

験により、一種類の生薬で普通用いられる。漢方薬は数種から十数種類の生薬を組み合わせてできる。例えば、頻尿の治療薬で知られる「八味地黄丸」は八種類の生薬から成る。

漢方の古典の名著「黄帝内経（こうていだいけい）」「傷寒論（しょうかんろん）」は二千年ほど前の中国で生まれた。病人の体力や病気の状態に応じた治療方法や考え方が書かれている。これらももとをたどれば、民間薬の研究から生まれたものである。経験の積み重ねで漢方の体系はできたのである。薬草の種類や薬効について述べてある最古の本草書「神農本草経（しんのうほんぞうききょう）」に、興味深いことが

書いてある。薬を目的別に上中下の三段階に分類している。「下薬」の項に、毒が多いので長期の服用は慎む、とある。現代の化学薬品は、漢方から見れば中から下に相当すると考えられる。

アマチャヅルやアシタバなどの民間薬ブームがあった。テレビで「やせた」と生薬の放映があると、電話の問い合わせに追われる。ブームに振り回される人は多い。

漢方薬がそうであったように、人間にかかわるものは長い年月をかけ試され、初めて適正な使い方や安全性がわかるのではないだろうか。そろそろ本物を見極める目を身に付けてほしい。

